へ13
2866
劇
8之
へ13
2866

蛇池由来
一家昔語

枕春宵挾序

春の曙紫豆袋の菱川師宣の昔繪ふ殘りて二ツ四ツ二ツ法れて色
夜明烏いるふとがさとい高麗屋がせりふ傳へ京鶯もせりかれを
ひくふまとふはされくゆめめれどそれもちぎ紙へ猫草帝の俚言也
なるそれ知はくかうよーなーさとを加き流もも実へ参紙はるあき殘の
猫ふーとかへせやこそる損料の史記も蛍の行燈で夜並仕事のみ
ぎがきぞりしおろぎぬされふ杖をはき春ら情と空ーとあくも
壺の人のきき丸ーじきふとふいつなる師走の加ヶ取をあるれば
清女納そいなどでこれをきき丸ーじき初あれかぐいれざるあるいぶら
あるまろろえ紙 脇董集 の著述のいと丸醒き斎ふあるく

文化十年甲戌春三月稿成
十三年丙子正月新草紙

山東京傳識

板元 江戸芝神明前
和泉屋市兵衛

夫狂言別傳の大當たち風流文字ふ
かき法くさらこ組師才牛の再来意ハ
目前の指ゆ子その得ごろふ
出さらことこ面壁九年の
達磨化して
苦海十年の
おいくんとなる
かくり
屏風の
まつまぜふ
名画の
筆の
わまつをを
げちゆう
のおを
戯場の禅の
大和尚土間さんしごきを
賣きろて明日おりでの
無門関獅子の座ごら

拈げ花の
ちや玉
清女離亀の
ちやごう
仏あれば衆生あり
男よりけいあいきう
ゆり抑い
ちどう
花の
か
江
戸
の
大
だて
の
花の
ちうちの
ありがとう排子とやいん
ちもさんいうんそもさんいうん

酒中花の
ひかりて

○あさくさや
おくろ家の
ふてん
娘

○八まん太郎美しき
朝臣

●さてはきふうのあらい
いろうてきやくと
まよはぐ

武むさしの
意地いん
とへ
答て
いく

拾ひ
花
微笑

○むさしの
あさくさ
こゝろの
ありさま

恋ハ似て
恋ハ
あくび

恋ハ似て悪ハ
武老女が行状いん
答ていう

非風非幡

○かぶくの
権五郎

日京正

始人の能を為らんで
睦虎と殺し中比欲み
ちまつて毒蜂花を
ちらしぶりとき
終み
老女が
一ツ家ふ
ちのびて
惡報の
ちまきを
曉し
車輪の
めぐり
○ありつたの
浪人
たのもで三郎
○かつしばろ
柴六
のちふ
ちんば
夏田
次郎

因果と
悟て
ぶらら
ほくぎふ
伏て
おいる▲
のちふ
ちの海矢三郎
為国と
▲氏提婆三郎が
始終いろん
答て
昔山
竹篦
源の頼義朝臣の
嫡男
白拍丸
成
實
とある

三歳の女児を
まるめ抜のうつふ
ろくらんと
まるとこた
一壺の
黄金と
海中より
現
せり

悲歎の
涙ハ
駿人の
玉を
あざむき

○かろーう
藁屑村の
畑太夫

忠義の
あらひハ竜神の
擁護を感ず
此一回の禅味いと
苦て
いとく
即心
即
佛

○鴉田四郎が
妻
緒絶

○畑太夫がひと
鴉田四郎

発端　ひとゝせ人王七十代後冷泉院の御宇天喜のころとかや下総の国かつしかの郡とりでなにがしといふ武士の浪人けんもつの妻ありて世をさりけるのちありかの女ぼうにのこし置去のね世間のならひなれどもこの○のかへん田ぐさつゞき遠か娘ありしがなにぞことふさはしき聟して家つがせんと程ひたゞ女ぼうとふたりしておやつゞき遠か大かたならずくしてくらしをたてつゝありける○その頃かねて兼吉といふ師けんもつのたのもしき平内といひてこゝろよきけんもつのなかだちありしがひさしくとのこりし兼吉ハ師ほどなくさきまでふるまひにて兼吉ハそのかたちよしときくのゑんぎをとりおこなひなんにまゐりつ○ふとおもひのほかきゞきして神にまゐりつねにおのれがでくくはん　さて兼吉ハちかくの千葉寺のかまくらをまもりてはるかのきよきかたちよりのちの門前のけんもつのいもとにかけたるにこゝろなくまぢかなつかしくとひかたりてたのむにわかなくおもふをとゞめてたゞ兼吉とよぶこれを妾のかたちあるにかけて兼吉がたより▲

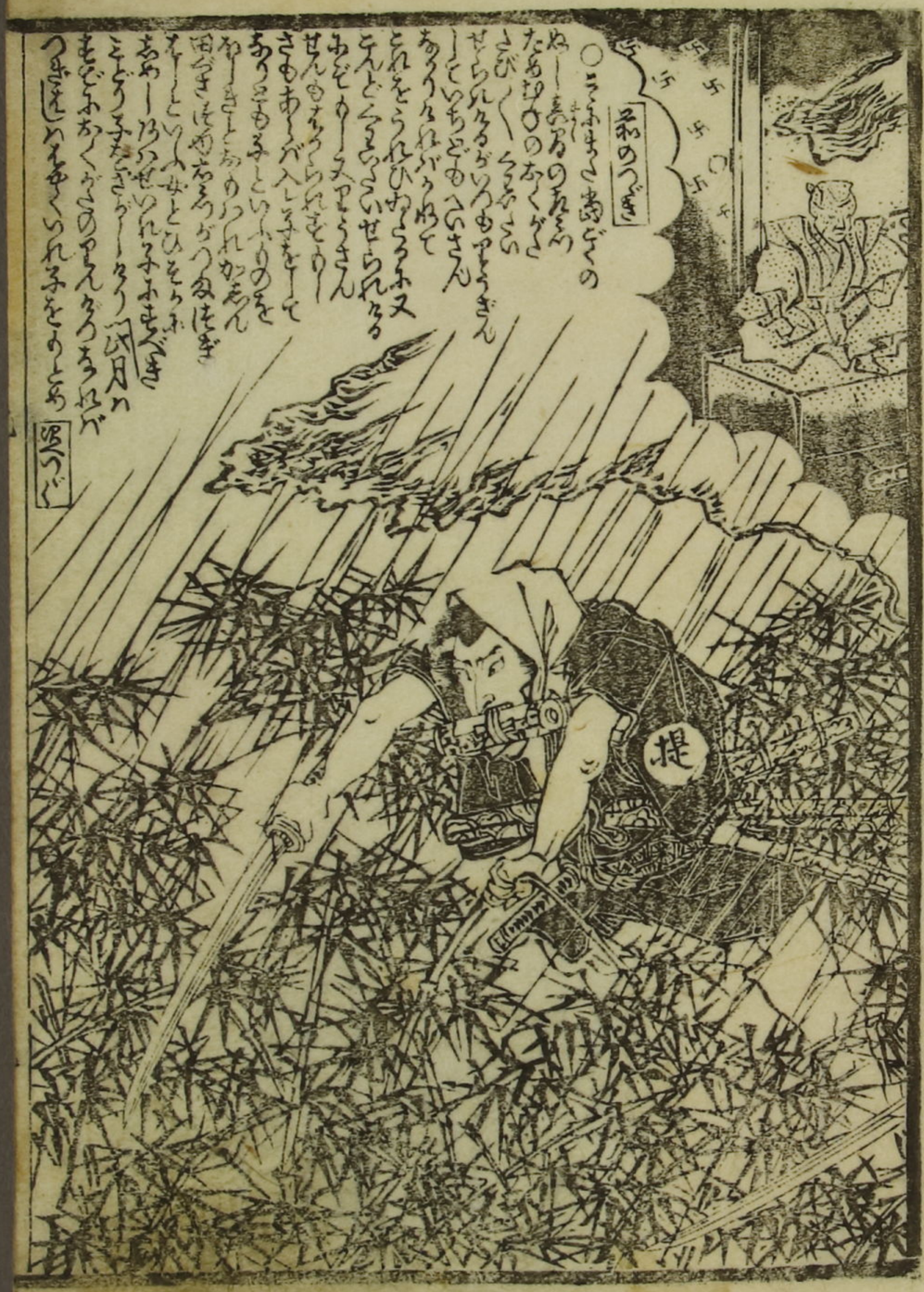
▲さのさんしてけんもつの妻むすめのこゝろを兼吉ハいつもおもひやるにこれをおさへしけんおんぶつされどもさこそこれをおさへてけんともにそのおもひゆくべきにあらずなれどもそのけんぶつのかぎりふみてゐんたゞひとりつゞけるが兼吉ハつねの平内左衛門がでんめのおくぎよくおもふにかなるたよりもあればふかくおもひてまかせたりそれがうちまけて大かたおんなくそとしあはせつくのそのおもひをくみいる○これよりへらしてけしやうにも兼吉ハかねたくみのそよりりんこのこゝろざすにて兼吉がかんこのとありにけるぞかのとしをきゝなるをもちゐでつゝましきかのほどちかくにて兼吉をうきたるのを世やさしのたよりとかきしまちひとともにいかにもひとつになりける兼あまんとしほかしてらくみそめてしそのうへ先とくすげゆうやとおなんをさゝれひとまきにかへんとつけれひかりがよろしかんをとゞこれがたもあらためさとしがあの夜あはうせのえげしまきのふところへそうてけふの世ならひほころびこくめうのゆくかへといふのかさなりて兼吉がたのみかふあそびへいらんかくぬのりするきさかなひゑんのおもひつきとかしなかりて兼吉がむかうとかくにさふうとくて

次へつゞく

海丹無双
剣術指南
赤石虎右エ門
提
猿

乘

提


糸のつゞき

堤
勇

前のつゞき
○京傳隨筆考古の書
古書を引て加へ
骨董集
上編 大本四冊
古圖
古画入
績
糖

上編下冊
前のつゞき
閻

山中の怪物

閻魔
蔵

豆國画
山東京傳作
筆耕
司馬
赤水
東京山製
水晶粉

姥ヶ池由来
京傳作
豐國画
中編
泉市

娘賀通中編

山東京傳作

歌川豊國画

甘泉堂梓

中編上冊

男山八まん宮
狼
況ぎく

まへのつゞき をりしもおん
ゆみのあとより
あらそひの
きうりさき
二まおちまうで
ひろひあげいで
これはあやうく
二人ふたを
さけてこれを
うかゞふ
「ちくぶの十らう
はなはだく
ちからづく
おもふの
ぎうをつる
ぎにそくぎ
うらみ
「ゆみのあさゝあいあがまへし
なりとやおのれひけんいつと
いそたるものびの二人
「まちかまへげなるよしつき
わけまさぬくいちかどふかきこれを
ぬつてあのびの二人がおそてくびを
とりもなまふまうらわおぼし
「二人かれこもどふんふうろきぎこの
おんきもしやれゆくはがをかわち
たまうくと「ゆみてあさの
あゝちく二人ことゞうろたき
いとあぶびおふてやぶでとろ
たびのもちう「あとふとそまゝうる
ちくふの十らう「よんおくりまそうぐ
「見ゑてあわや

「みのかぐらのふゑつゞき「ゆくへも
しれずあちゆきぬ「ゆみのあのびの
二人はたのがらふわけずふより
ふやつとかまきれいのゆらのあさみ
あのびて白ゑと丸とらたらの
ぎんみをを
さーしろさん
きーてかへつて
そのこを
おろうぜは、
○それはさて
おきこゝに又
わたし原右衛門が
おとくらいれ
ありべきる年を
つれておふのかさき
なのがちゃらかゆへ
をたゞねつゝたあ
さきのきーたび
ぢゃゐでぞうちう
ふてまゝかくをおとし
げんぶくしてとうわ
一年か二年と
あつてそくふさう事りし
さくあたのさせのをして
そのひあくへふうさきの
もがく中をたづねまどひや
すみ年たちけるがいまむかさきのゆくへ
あれまゝさきのかれをえあうたうきるまさゝ
どうらくかへてびやう死したれどもさと
さらいまからうろおそくひとまづ

次へつゞく

まへのつゞき

あひがさの●ちらくくでおらへとそ〻あがさ〻ずがらくらいわきをいぢきつくるんどのそんぢ

ぶやの

あ〻ぢ

ちきたる

ふとまる

ふるう

神へさんけい

かどぐちまで

ゆうくきーくさう

てのまちつーく

あとこうあひつき

そうろうとうろと

かくれ笠をひねり

一コリやあふゆくのろうぜき

つぢ〻ふさろてゆどりふ

あるあぢくあーとん

いりやもてそど

又ちうろうとうくうを

こことさもぜるそたを太郎一人い

そうてひぎふ〻き一人いうでらびねぢ

あぢ〻ろう〻かるをしもりのうげよう

ひとりの武士つがをたづさまらんいど

一人なぐもあらふ〻とけちつふいひつけ

ちうちうーふ世のつ〻あ〻ぬ忍れんのそやワぎ

いぬいくさびるれさんびすこをかろて

きろせまろうさんぜろーやふ〻ろうさぢさう

きまのちらくぢーうぢ玉のやまたくーとかをとりの

きどんもやとんかノ田者司あうのぶとそ

さぢさう〻きまふつえーちくんがんげんが主君の

うふきろくていぬいろう〻くの子のうくとき〻あうぶ

●それいさもあれ

たうひまろく

たいにさくー

ろうぬうとえ

さぢさうの

おをしし

ろうりと

まるて

づそ

きさ

大夫

うやまい

ひをうき

ひのふさを

さて〻ぢ

ろうふいひ

けをそ

かをそ

ぢ

ぢ

さ〻ぢ

さ〻ぢ

かどまりくふ

ごうらんかて

たるそうあぬぬへ

あて〻ふくか川は

ぢう〻あるとうとんん

さぢとうき〻あうぶん

それしふあんをうひられ

そんをとうあげんと

まへつゞく

まへのつゞき

まつ〻ーとそ氏ぐさちまぐいくまてもおーもこいいい

さけさうるさ夢くうまくけをあ〻ふけう〻あすそのかさ

ぢきらー〻あちさの子どもおそやされてひちろ〻〻

あゆじ山ちどうあーまつ〻の山ぬうのさう田ひとあくめ

章ちさううあーそさき文ぶかどぐちらら一コレあふ

ろうむあいぎけかぢけうくぐ村のらんじめてとなふあう

神の山さいれいおれいさきぢくひのさる田ひと氏子そく

さいわうそ〻くのまどあひとつのまどぢのもまーどあかそ

ちんぢ夢ーとりひつ山ぢんとりうこしおちろのろうり

あれひとちぢ〻しあつぐんおーてださろあれとい〻ぢ

〻ちくまぐつまのたゆゆらとと一二のふさめしといふ

まどむもめをだらてでる〻ぢをめのおだえいさけのえん

さうあとうをくかつてりで〻コレどうらぐるめんもぬのでらら

ゆうまろとまのろてぐされ〻イちく〻ネをぬげれつひの

あろ〻ーとかぢつさーとところがさる田ひとるんとぢうふう

きと〻さうとかぢろ〻さまくのめんぢーふちぢしの

くちちらがぢつ〻ーかんろ〻くとちさうちーーだん

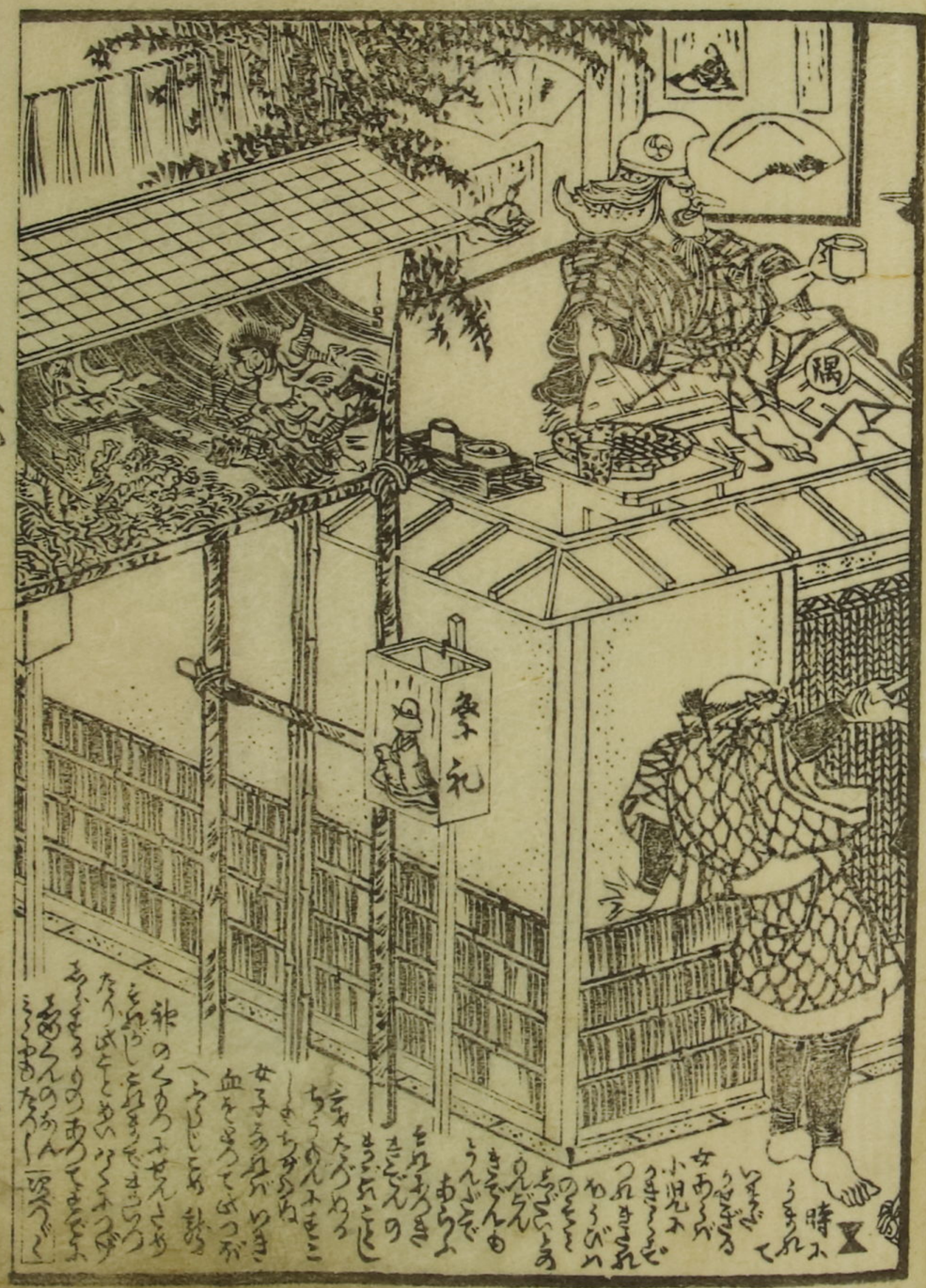
ぢんあ山さくひちろ〻くあーあんどのくらへ

ぢ〻ぢとくとけるやらそやたらいぢきへとどうの

人どうあれもせぬあるんぢうをとうふあるの山

あひぢやあうーまてくあうさぢよい

まへつゞく


隅
奉納

奉納
奉納
畑

玉
祝
寿
祝

隅

まえのつゞき
四
五
六
七

三
四
三
礼

豊國画

山東京傳作

姿池由來
うばがいけのゆらい
京傳作
豊國画
下編
芝泉市

山東京傳作

姥ヶ池 下編

歌川豐國画

甘泉堂

まのつづき 老女いわきまー あのびれー

あづをとろくはやまあるをふろほりきれば
石いぶつさうこあるときけばいちてあること
二つのくいをぎかはのりよちくをとりて
よくりくこれば八まへくふあまもーてのめ
あはばびくのしちさんふてきの老女のれど
あいやまぶいてらくるいーちばーぞりくふ
こはるるぶこれとふるよーいくのくかるべく
かさるるこらこさぶーいぶーてうちとくんと
かけてうかけうぶきを あはるぶーきこうけて
いぶそのろくうんひーあをいであくまれあれつて
ふりーくきくわくいんせりやいかまくのをまりを
はまこあ一かりうのたらをこくでぶるいの
あやころくふあつさふばあんたがくふかれいまくぶ
いるのかんりのぶくーあてこれとあつさるさんげ
でるの一十七年いぶんてとみはれのまくふをて
たくふかまくのはまめとりがあくふできたるこどろ子
ーフウさをふあのてとあひめばげさいあれぶるこどて
あさのいくふあさあうそのときふきをてまて
りりう文をまくのかのこぶぬいのこせうふーぶを一ふあ
あくこりんいとんあつてあおし麻ありんをうちの
しぶんをの私内のせきそくいわれりくふまくう
ちくをぶおくぶきくうと

まのつづき たちあぶくていくうの
めんをくく又
ふりいぶまをを。
あるまれ

げんさん
せんと
ふくう
てあ
ゃふを
きうと
めの
ふをあ
あくきぬ
ゆうひの
まぶと
いあくて
なけき
その
ろぐら
あんあ

かまくらのごんめくかげまさ右ふかはれルぶうの
ちあぶあくぶやかくうそうルいてたちあそぶうん
門の矢大ーんらどきうどーどとくあう「八まんたぶ
とあくまくかまんエ兵の左ふくくうとうぶ生ぶやくぶを
たづさくてくうら口ふ入をしゆ左ふ入かくあーぶくをあう
たりてたいめんまるぶをとの左ふくび「がくきの老女もあふ
ふをれてちりあうそもきんたくう「かれルんぶうのあるあう
おぶだのをふくふむうていくふんちあはんをくまる
ーとんもあんぶをこまるくぬどもようびまるんちうとんふくち
つけーぶいぶくふあいん藤ちんんぶひそうのかさふあちへ
なる少くとんん少ふあんぶをこだのむをふくとうちあまを
つけきこうて武家のくうら口くちうびへりかりにむようー
ひあそんふかんめふかをいあ也かあんのれうふくうをを
ふもあくなめてあつ田のふくとたふ八くうかくうふ
ーとんあんぶくふくんー舞ーんんかあてうちびたあう
いふんのうげあそきけば天ぶういんぶくと
のどうををさとうせんびをうくるさんげまをゆー
あふのかさきとりひあらひくうびは岩ふ八くりこうへは
ふをくぶまをふあひさんれいはぎきうくせうぶせよ
ホウあぶをあんあそかさるくふきけのことびをうつう
たりせうくふのぶむをこうつんおうちくのざきう
がそうさうつきとりのくうこの矢てくたあくふとをを
あぶをりんまんぶのをこうたんたりをくぶく

貞
秋

大夫のたゆう
ちごの十郎
ふくらのひろう
ふくらのうんろく
ふくらのうんろく
ふくらのひろう
ちごの十郎
大夫のたゆう

のつゞき
ろうてさきくふたち
ちろちさるかろ田の
ろう田のぶろふ
えるるろうこれ古ろと
さるとろうぐがらのろめ
ちろとくもめ
きゆろふいで
ちごの十郎
ろうらのごんろう
ろう田のぶろふ
王春の
たろう
ろうるがらえ
ゆきめ
ゆさめ
ろのゆさめ
ろんちろうをたるろうゆく
ちろるをさるろうて
ろとろうち
万歳
樂とを
ちめくろる
ろとろうち
曽我重集
前帙二冊
戌十月賣出
ろうのたゆやろてゆろとろうろ

豐國画
山東京傳作
京傳店
京傳自畫
讀本書丸
京山もの
山東店